
僕とルカの非日常

神坂 保温

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とルカの非日常

【Nコード】

N6286J

【作者名】

神坂 保温

【あらすじ】

大学生、音羽圭介の元に来たボーカロイド「巡音ルカ」。父親から送られてきた彼女と過ごせる時間は7日間。 心に影をもった少年とボーカロイドの少し奇妙で非日常を描いた短い物語。

7日目に少年は何を思い、何を考えるのか。分かるのは傍観者の貴方だけです。 ボーカロイド？なにそれ？という人でも出来るだけ分かるようにした作品です。他にもルカ好きの人でも楽しめる作品になっていればいいのですが・・・。同時にこれはルカの誕生日に合わせて制作を始めた作品でもあります。（1

3月31日・あらすじを修正しました

25年 3月 28日 AM:5:00

ボーカロイド

VOCALOID

音声合成技術の総称。

簡単にいえば自分で作ったメロディーと歌詞を歌ってくれる^{ロボ}ROBOTの事を指す。

外見はすべて金属で出来ており、足は二足歩行。いかにもSF映画に出てきそうなROBOTだが声だけ製品によって違うらしい。

らしいというのは曖昧だが僕はテレビで声を聞いたぐらいだからだ。初期の頃のボーカロイドは歌を歌うだけ・・・とそれが当り前なのだがそれ以外は何も出来なかった。

しかし、年月が経つにつれて色々な機能が付けられた。それこそ携帯のように元々の役割が目立たなくなってきた。

なぜ色々と機能を付けてきたのか。答えは単純に少しでも人間に近づかせようとしたためだった。

結果的に現在のボーカロイドは家事をしてくれる便利なROBOT、になってしまった。

しかし、一家に一台というわけにはいかない。

値段が700万程度なので誰でも簡単に買えるわけではない。

それでも売れているには売れている・・・。

そして中には値段が付けられないボーカロイドもあるみたいだ。

見た目は人間そっくりでまず区別することは不可能らしい。

それではどうすれば区別できるか。左肩に製造番号が書いてあるの
でそれで区別をするのだ。

世界中には数個しか存在せず外見と声は個々によって違い、同じの
は存在しないとか。

どういった経緯でこのようなボーカロイドが作られたかは不明だが

入手する事はまず無理らしい。

ここまでは調べたら誰でも分かるだろう。

そこではここで少し疑問を投げかけてみよう。

見た目が人間と同じなら彼らの中身はどうだろう？

何もかも冷たい金属で出来ている体。

700万と値段が付けられているROBOTなら単なる鉄の塊だろう。

しかし、彼らは見た目だけではなく『中身』もほとんど人間と同じだ。

こんな事知らない方がいいのかもしれないが・・・今更忘れる事はできないだろう。

腕を切れば血が出る。熱い物を触れば火傷をする。体を不自然に曲げたら骨だつて砕ける。

実際にこのような事をしたわけではないが彼らの一人が血を流しているのを見たことがある。

しかし、1つだけ人間とは違う事があった。僕たちと違い彼らは自己治癒力が優れている。

だから、彼らはROBOTでもなければ人間でもない。ANDROIDアンドロイドと呼ぶのが妥当なのかもしれない。

・・・すまない、やはり訂正させてもらう。gynoidガイノイドと呼ばれるいと彼女に失礼だった。

なぜ、それを知っているのか。答えは簡単だ。

本人が自分の事をそう言ったからだ。

僕が知っているボーカロイドの情報はこれだけだ。

だから、ここで書き終える事にする。

2025年3月28日

「これで終わりか・・・」

パチパチとキーボードを叩く音だけが部屋に響いていた。昨日からパソコンと向き合ってたやっとなら書いた。

今は朝の5時、薄っすらと窓から朝日が差し込んでいる。

壁に掛けられているカレンダーには3月28日のところにグリグリと赤い丸が何重にも書かれている。

「ふぁーさすがに今日は誕生日だからな。一度、睡眠とろうか」

腕を頭の上で伸ばすと思わずあくびをしてしまった。

カレンダーに書いてある赤い丸は誕生日ともう一つ意味があった。

1年前のこの日にある女性に会ったのだ。

また同じ日にひょっこりと現れる・・・そんな淡い期待を抱いている自分がいるのだろう。

しかし、それ以上考える前に睡魔が僕を襲ってきた。

パソコンの電源を切り、ゆっくりとベットに体を運ぶ。

そのままボタンとベットに倒れこんだ。フカフカのベットが気持ち良くて段々と視界は暗くなっていった。

ふと右手を誰かが握ってくれたような　そんな感覚がした。まるでそこに誰かいるような。

そして夢と現実の区別が出来なくなっていた僕は彼女の名前を呟いてしまった。

「ルカ」

24年 3月 28日 AM:11:00

ピピピピと右手に持っていた携帯から着信音が流れてきた。

今日は3月28日、僕の誕生日だ。

ベットに寝転びながら携帯の画面を見ると谷川雄介タニガワユウスケと書かれていた。

「もしもし、何の用？」

無愛想な応答したが谷川は何も気づいてないようだ。

『おー今日は寝てないのか』

「誕生日の日ぐらい起きてるよ」

『そついえば、お前今日誕生日か。えーとそれはいいとして今日昼から時間ある？』

「今日は 少一人で過ごしたいかな」

視線を少し左に向けると窓から見える青空が綺麗だった。

『あーそうか。わかったよ。それじゃあまたな』

「うん、誘ってくれてありがとう」

谷川からの応答はなく変わりに携帯からツーツーと寂しい音が聞こえてきた。

誕生日なら誰かと過ごすのがいいかもしれないが僕は不思議とそういう気分にはなれなかった。

一人になりたい。誰でも一度は思う事だろう。僕はたまたま誕生日にそういう気分なだけだった。

窓から視線を離し左を見ると机の上にシャーペンやノートが乱雑に散らばっている。

ノートには小さく音羽圭介^{オトハケイスケ}と書いてある。

今は春休みで大学にも行かなくていいので昨日はずっと勉強をしていた。

好きで勉強をしてるわけではないが他にやる事がない、理由なんてその程度だ。

昔から物事に関心というものをあまり抱けなかった。だけど、音楽だけは好きだった。

歌うというより聞く方が僕は好きだ。

だから、この頃は少しボーカロイドに興味を抱いている。

自分が作ったメロデーと歌詞を歌ってくれるなんて夢のようだ。

しかし、最近のボーカロイドは無駄な機能が付き値段も馬鹿みたいに高くて僕なんか買う事は不可能。

「はぁー誕生日プレゼントに誰かくれないかな」

ゆっくりと体を起こし呟いてしまった。

ピンポーン

ビクツといきなりの音に反応してしまった。

ピンポーンピンポーンピポーン

チャイムがいきなり鳴るとけっこつびっくりするものだ。どうやら

急いで僕に出てきてほしいのか来訪者はドアベルを連打している。少しも止む気配はなくチャイムの音はまだピンポンピンポンと鳴っている。

「今行くので待ってください！」

怒っているわけではないがチャイムの音で聞こえないだろうと思いつい荒い声を出してしまう。

ベットからゆっくりと体を起こし玄関まで小走りで行く。

途中、壁についているモニターがチラリと視界に入る。訪問者の顔は見えないがピンクの髪と黒の服が一瞬見えた。ドタドタと台所を横切り玄関まで来た。

「今開けますー」

やっと聞こえたのかピンポンという音は聞こえなくなった。

ガチャとドアノブを回しゆっくりとドアを開けた。

そこには女の娘がいた。いや、女の娘と言うのは失礼かもしれない。見た感じ20前後の女性がそこにはいた。

真っ白な肌で少し病弱にも見える。腰まであるピンクの色の長い髪、青空のような綺麗な青い瞳、耳には茶色のヘッドフォンをつけている。

ジーと彼女を見ていたが、女性をジロジロと見ている自分が少し恥ずかしくなってしまった。すぐに右や左などを見て彼女と目を合わせないようにした。

対して彼女はキョトンとしていたがすぐに笑顔になった。

「初めまして、メグリネ巡音ルカです。1週間よろしく願います」

「え……」とついつい声を出してしまった。

「1週間？話が掴めないんだけど・・・」

「あれ・・・？」とルカも同じように驚いたように声を出した。

「音羽さんから何も聞いてないんです？」

「音羽さん？えーともしかして音羽啓一郎、オトハケイイチロウ僕の父親のこと言うてるの？」

「はい、そうです。んー聞いてないならこれを渡せばいいのかな」

ルカは片手に持っていた封筒を僕に渡してきた。

封筒は表には何も書いていなく後ろには小さく『圭介へ』と書いてある。

ビリビリとふたを閉じてあったテープを取って封筒を反対向きにすると白い紙が落ちてきた。

開くとボールペンで文字が書いてある。

圭介へ

いきなり彼女をお前の元に行かせて少し戸惑ったかと思うが、彼女はお前の誕生日プレゼントだ。

詳しく説明をすると彼女 巡音ルカはボーカロイドだ。ボーカロイドといえばお前は鉄で出来たあのロボットを想像すると思うが彼女はそれのNEWタイプだと思ってくれたらいい。

但しルカがお前の物になるというわけではない。彼女といれる時間は1週間だ。彼女は金で買えるものほどお安くはない代物なんでな。少しある人から借りただけだ。

ルカもボーカロイドだから家事もしてくれるし、お前にとっては嬉しいことだろう。

音楽の方は彼女から聞けば全て教えてくれる。

それとロボットといっても食べ物を食べないと動かなくなるからな。その辺も分かかっておいてくれ。

分かっているとと思うがルカは見た目通り女性だ。少しでも彼女と楽しい時間を過ごしてあの娘の事も忘れたい。

今頃だが誕生日おめでとう。

父より

いつの間にか僕は紙をクシャクシャに丸めてしまった。

(父さん、違うよ。僕は彼女のことを忘れる気はないよ)

「あの一大丈夫ですか？」

丸めた紙を何時までも見ているといきなりルカの顔が視界に映った。

「あ……いや、ごめん。なんでもないよ。とりあえず中に入って」

片手で丸めた紙を持って僕は部屋に戻った。

24年 3月 28日 AM:11:30

ゆっくりと僕はベットに座るとルカはどこに座ればいいのか分からないらしい。少しあたふたしている。

「あーそこに座ればいいよ」

「あ・・・はい、わかりました」

ルカは机の横にチヨコンと正座をした。

さつきは服装に目がいつてなかったが今見るとかなり特徴的だ。全体的に黒で統一されており、所々の縁は金色で彩られている。

下半身の部分はチャイナ服と言えればいいのだろうか。太ももまで露わになっている服は露出度が少し高い。

同じように膝上まであるニーソックスがほとんど皮膚を隠している。上半身は真ん中に黄色の線が入っており、少しヘソの部分が露わになっている。正直寒そうに見える。

他にも腕に付けている機械らしき物、肘の上に何か分からない物を巻いている。

こんなので町で出たらけっこう目立つだろう。

「えーと、これが気になるんですか？」

そう言いながらルカは左の肘上に巻いている物を右手で掴んだ。

「あーうん。なんで巻いてるのかなーって思ったんだ」

「後で説明しようと思ってましたけど、その前にお昼食べませんか？私が料理しますので」

スツとルカは立ち上がり台所に向かった。

「いやいや、昼飯ぐらい僕が作るよ」

「圭介さん、私はボーカロイドです。人間のお手伝いをする為に生まれたんですよ」

ベットから勢いよく立って台所に向かおうとしたが、その言葉で足は止まってしまった。

彼女はあまりにも人間に近く、ロボットとは到底思えない。だから僕は人間のように接してしまった。

再びベットにドスツと座るとシャアと蛇口から水が出る音がした。

「冷蔵庫にある材料で適当に作って構いませんか？」

「別にいいよ」

ガチャと冷蔵庫を開ける音が聞こえてきた。

本当に彼女はロボットなのだろうか。心の中で疑問が浮かんだ。

まだ会って数分だがしゃべり方といい、動き方といい人間としか思えない。逆にそこまで日本の技術が上がっていると考えると良いことなのかもしれない。

しかし、なんでロボットなのに食べ物を食べるのだろうか。そこまです無理して人間に近付けなくてもいいような気がする。それに父さんはNEWタイプだと言っていたがテレビで一度も見たことがない。こんな物が作れるのなら日本中、いや世界中から注目されるだろう。なぜ？なんで？どうして？

様々な疑問が生まれるが、彼女に聞くのが一番早いだろう

24年 3月 28日 AM:11:50

「お昼出来ましたよ」

頭を抱えて考えているとルカの声が耳に入ってきた。

「あれ？もう作れたの？」

下を向いていたが素早く台所を見る。丼を二つ持ってルカがこちらに歩いてきていた。

「卵どんぶりなら20分もあれば作れますよ」

ルカは笑いながら丼を机の上においた。卵どんぶり・・・あれ？なんで僕の好きな料理が？

「えーと父さんから好みの料理でも聞いてきたの？」

小走りでルカは割り箸を二つ持ってきた。どこに割り箸があるかよく分かったものだ。

「圭介さんの事はだいたい音羽さんからだいたい聞いています。もう少しぐらい理解しておかないと一緒に暮らす時不便ですからね」

「はい」とルカは片方の割り箸を僕に差し出した。

「ありがとう。それじゃあ君の事も教えてくれる？さっき言ったけどその腕のやつとか」

パキッと割り箸は綺麗に割れた。逆にルカは少し変な風に割ってしまつたらしい。「うっ……」と言いながら箸を眺めていた。

「これは製造番号を隠している為に付けているんです」

ルカはそう言つとペリッと腕に付けている物を僕の前で外した。腕には03と赤く書いていた。これを見ると本当に彼女がロボットと思える。

「なんで隠してるの？」

「街中で目立つということもありますし、この番号の部分の皮膚取れるんですよ」

まだ湯気が出ている卵どんぶりはいつも自分が作るものより美味しかった。この分だと何を作っても上手そうだ。

「取れる？取れば何かあるの？」

「ここからUSBに接続出来るんですよ」

「USBね……皮膚が取れるって考えるとかなり惨いことしか思い浮かばないね」

「外しましょうか？」

例え機械といえど今は昼飯を食べている。さすがに今見せられるのは気が引ける。

「今はいいよ。それより製造番号が03って事は後2人ルカみたい

なのがいるんだよね？」

「いますけど、3人いますよ。製造番号02は二人いるんです」

「その人たちの名前は？」

友達に　　というか谷川はボーカロイドの事はよく話してくれる。
あいつならルカのことや他3人も知っているかもしれない。

「製造番号01は初音ミク。製造番号02は鏡音リン・レンという
名前です。開発された順番でいけば3人とも姉さん、兄さんです」

ズズズーと音をたてながらルカは卵どんぶり食べ終えた。あれ？少
し食べるの早くないか。お腹空いていたのか？

「兄弟か……。にしてもルカ食べるの早くないか？お腹でも空い
ていた？」

「はい、少し……」

なぜかルカの頬が赤くなっているように見える。ロボットなのにな
ぜ赤くなるんだ。

「ロボットが腹を空かせるか。本当に人間みたいだ」

「……？ロボット？」

井を台所を持って行くこうとしたルカだったがなぜか足を止めた。ど

うやらロボットという言葉に何か違和感を抱いたようだ。

「ロボットがなにかいけないのかな？」

「圭介さん、なんで私がロボットだと思っんです？」

「そりゃあ君がボーカロイドだし、父さんの手紙にもロボットと書いてあったからね」

「ツツ・・・」

ルカは何か言う前に言葉を詰まらした。なんで言葉を詰まらせるのか・・・僕には分からない。

そして1、2、3秒と少しの間沈黙が続きふとルカが声を漏らした。

「音羽さんは圭介さんに嘘をついています」

（嘘？）頭の中で一つの言葉が浮かんできた。

父さんが僕に嘘を？ルカがロボットじゃないっていつのか。じゃあ彼女は人間　？

「それじゃあ君は人間だって言うのか？」

「人間、ですか　。あながち間違ってはいません」

あながち？意味が分からない。

「君の言ってることが少し分からない。人間があながち間違ってないなら君は何なんだ？」

「私は・・・ロボットでもなければ人間でもありません。アンドロイドと言えば分つてくれます?」

アンドロイド?どこかで聞いたことがあるけど、それもロボットではないのか?

ルカは僕の顔を見て判断したのかさらに付け足した。

「人造人間と言えば分かりますよね」

「人造?」頭が追いつかなかった。なぜだろう、突拍子すぎて内容が理解できない自分がいる。

人が人を創つたなんて非現実すぎて・・・。

「人造人間もロボットも同じじゃないかと言われれば私は少し怒りますよ。鉄の塊と肉の塊は違いますから」

シャアーといつの間にかルカは台所で井を洗っていた。

「私たちも刃物で皮膚を切れば血だつて出ます。体を変に曲げると骨も折れます。少し人間と違うだけなんです」

ルカは何かを言っていた。聞いてないのは失礼かもしれない。ただ、彼女の声は頭の中に入らず代わりにカンツと割り箸が手から離れ床に落ちたのは自分でも分かった。

24年 3月 28日 AM:11:50 (後書き)

ロボット：鉄で作られた機械

アンドロイド

人造人間：人間のような肉や血で作られた機械

少しこちら辺はややこしいかもしれません・・・。

実際、人造人間とはロボットの事を指しますがこの小説ではのよ
うな違いがあると思っています。いてください。

24年 3月 28日 PM:4:20

「あれ・・・？」

足の方に少し違和感を感じ目を覚ましてしまった。
約5時間前、昼食を食べ終わり少し気分が悪くなって

「そのまま寝てしまったのか」

目の上に置いていた腕をどかし、違和感がある足の方を見ると少し驚いてしまった。

だけど、声もを上げることができない。

人間ではないと言われようが彼女を起こすことはできない。

少しずつ足をずらしスースーと寝ているル力を足から離れた。

部屋は電気が消してあるが窓から入ってくる夕焼けが部屋の中をオレンジ色に染めていた。

「このままでは少し、いやかなりまずいよな」

ベットから体を下ろしベットにもたれかけているル力を仰向けに床に寝かした。

しかし、これもまずい。

背中に手を回し抱き上げ

「これはこれでちょっと・・・」

自分でも顔が赤くなるのが分かってしまった。

世間一般ではこれをお姫様抱っこという。年上の女性にこうするのも人生で数回・・・てか一度もないだろう。

しかし

やはり重い。

やはりというのは失礼か。

重い、重い・・・人間の重さだ。だけど、彼女は人間ではない。なぜ創った。彼女が可哀そうだ。

可哀そうと言うのが失礼なのか。

ゆっくりと手からルカを離しベットの上に置いた。

そしてついついルカの顔を見てしまった。

女性の寝顔を見るのはNGと昔誰か言ってた気がするが、それは無理だろう。少し硬い表情だったが今は自然だ。

今も全く起きないところを見ると疲れているんだろう。

「さて、何をしようか」

少し考えた結果シャーペンでサラサラと紙に文字を書き玄関に向かった。

紙にはこう書いた。

『少し買い物行ってくる』

ドアを開けて外に出るときに彼に電話をかけた。

3回のコール音で彼は出た。

「あー谷川。今ちょっと会って話せる?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6286j/>

僕とルカの非日常

2010年10月11日00時26分発行